
ショートショート集

(') ウボア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ショートショート集

【作者】

N-1-3899G

【作者名】

(一)ウボア

【あらすじ】

たくさんのショートショートが入っています。

虎

ある国の中には、一頭の虎が居た。

この虎の名前は、「タイガー」。なんともセンスのない名前だが、本人は気に入っているようだ。

ところで、この虎はとてもお腹をすかせていた。もう三日三晩、何も食べていよいよだ。

この草原、いや、この国自体に、草食動物といつものが全然いないのだ。ほとんどの動物は、肉食動物である。

タイガーのまわりにも、十頭ほどの虎が見えた。

「腹へったなあ。草食動物ども、いないかなあ。」

虎のくせに喋るなんて前代未聞であるが、このセリフはあくまでも心の中で言っているようだ。

「お、いたいた。あいつ食つてやつか。」

どうやら、一頭の鹿がいたようだ。タイガーは、全力疾走で鹿を追いかけた。

だが、まわりの虎もそれに気づいたらしく、タイガーについていく。タイガーが鹿を捕まえた。後ろにつづいていた虎たちは、タイガーの上に覆いかぶさるようにして、鹿に牙をむけた。

ガキン！

虎どうしが、牙をお互いの顔に刺してしまった。

生き残ったのは、タイガーのみ。

死んでいるまわりの虎たちを横目に、タイガーは鹿をむしゃむしゃと食べ始めた。

ゲーム（前書き）

「〇のシートシートが入っています。

ゲーム

ゲーム

やあ。俺の名前は西田健一。職業はもとサラリーマンだ。

俺は、小学一年生のころからゲームをしていた。最初は、一日一時間をまもっていたけど、だんだん一日一時間、一日三時間とふえていき、小学六年生のころは、一日十時間くらいやっていった。それくらい、ゲームがすきだったのだ。

だが、ゲームをやりすぎて勉強が頭に入らなくなり、中学受験ではすべりどめ含めて全て落ちてしまった。だが、また高校受験で頑張ればいいやと思い、まだ、ゲームをずっとやっていた。もちろん、勉強などとこなすものは全くやらず、定期テストも学校を休んでのんびりしていた。

高校受験は、底辺校になんとかうかつたが、ゲームに熱中しすぎて、ほとんど学校にはいっていなかつた。不登校認定はされず、ただ休みがちな生徒と見られていた。

大学も、底辺校になんとかうかつた。学部は工業学部。だが、一日中ゲームをやつていてる俺は、やはり学校にはいかなかつた。もはや、行つていても行つていないと同じで、学歴のために大学に行つたようなものだつた。

そして、サラリーマンになることができたが、今は、無職である。ゲームに熱中しすぎて、朝早くから会社へ出かけることができなく

なつたのだ。

ゲームのせいで、俺の人生はめちゃくちゃになつた。

文字数あわせです

あいうえおあいうえおあいうえお小説小説小説あいうえおあいうえお
お小説小説あいうえおあいうえお

ウォータースライダー

山田志県大里町にある、巨大なスイミングパーク「スーパーワールド」。

今日は、ある小学生のグループがここへ遊びにきていた。

このスーパー・ワールドには、三つのウォータースライダーがある。一つ目は、「ソネル二賣つれで」、二つ目は「スライダー」。

二つ目は、トンネルに覆われている、とても長いスライダー。とても開放的で、スリルたっぷりのスライダー。

三つ目は、ごくふつうのステイタス。

小学生は、せっぱりウォータースライダーが大好きだ。この小学生
グループのうちの一人が、言った。

「チュー・ブスネイク（一つ目のスライダー）」のやつよ。」

このスライダーは、非常に高い位置から落ちる。そのため、かなり長い階段をのぼらなければいけない。

階段をのぼりきった小学生のケルーハは、やはり少し怖いのか、が最初にいくのかじやんけんで決めることになった。結果、のりのりと言い出した少年が一番にすべることになった。

少年の順番になつた。かなりきつい傾斜のチューブスライダーを、滑っていく。

「うひよー、気持ちいい！」

右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、きつい傾斜を
おり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、きつい
傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、
きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふ
られ、きつい傾斜をおり・・・

さすが、長いこと有名なウォータースライダーだ。びっくりしてしまつほど、長い。だが、ウォータースライダーをこよなく愛しているこの少年は、決して飽きるとはなかつた。

右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、きつい傾斜を
おり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、きつい
傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、
きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふ
られ、きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、
左にふられ、きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、右にふ
られ、左にふられ、きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、
右にふられ、左にふられ、きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふ
られ、右にふられ、左にふられ、きつい傾斜をおり、右にふられ、
左にふられ、右にふられ、左にふられ、きつい傾斜をおり、右にふ
られ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、きつい傾斜を
おり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、きつい

長い。いへりなんでも話す。おの。おので話へしたら、これこの問題もあるんぢやないのか。

右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、きつい傾斜を
おり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、きつい
傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、
きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふ
られ、きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、
左にふられ、きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、右にふ
られ、左にふられ、きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、
右にふられ、左にふられ、きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふ

駄目だ。いつまでたっても終わらない。

実は、この少年はこのスライダーをとおして四次元空間におくられていたのだ。

一度おくれてしまつたら、もう一度とスライダーから出でへぬことはできない。少年は、永遠にすべつづけるのだ。やう、おひそかになつても、ねじさんになつても、おじこさんになつても、そして、死んでまゝ・・・

小学生のグループは、この少年だけいないのに気づいていたが、あ

まり仲良くなかったのか、無視してかえつて行つてしまつていた。

ある男が、スキー場でスキーをしていた。男が滑っていたゲレンデはとても傾斜が急で、よくふぶくゲレンデだった。

男は、スキーが大の得意だった。パラレルターンで、シユツシユツと雪の音をたてながら物凄いスピードで滑っていく。だが、ゲレンデの中腹あたりでこけたようだ。スキー板はゲレンデの横をむき、木だらけのところにつつこんでしまった。そこにはひもでさえぎられているようになっていたが、男の勢いが強すぎて、ひもをきつてしまつたようだ。

ひもには、このよつなことが書いてある看板があつた。

「魔のガレン沢 こちらへ落ちると、もどつてこれません。」

男は、すでにこの看板をしつていた。大急ぎでもどつとしつたが、スキー板の勢いはとまらない。

男は、木にどんどんとぶつかる。顔は既に血だらけになつていた。スキー板も、木にあたつて変な方向にまがる。それにあわせて、男の足がぐにやつとまがつた。

何十分もすべつた。やつとのことで、スキー板がとまつた。だが、まわりを見渡すと、木だらけ。どつちがどつちなのかも、わからぬ。

遭難してしまつた。どうしよう。男は、右へと歩いていった。こちらがゲレンデ側なのかは、わからないが。

しかし、歩いたとき足の異変に気づいた。両足が変な方向へとまがり、歩くと足がとてもいたいのだ。

しかたなく、男はそこで眠ることにした。

その夜は、吹雪だった。男は、一度と田覚めることなかった。

地震が多いことで有名なある都道府県のある町の崖のすぐそばに、一人の少年とその母親が住んでいた。

父親は大昔おきた大地震で既に死んでいて、少年がたよりにできるのは生き残った母親だけであった。

少年と母親は、父親がいなくても、毎日楽しそうにしていた。

ある日、少年が住んでいる家がある地域に、大地震がおきた。

少年と母親は、なんとか助かった。お互いに抱き合って喜んだ。

次の日、その大地震の大きな余震がおきた。

少年が、大怪我をした。だが、死にはしなかった。

死にそうになりながらも、なんとか耐え抜いた少年を見て、母親は泣いて喜んだ。

さらに次の日、またもや大きな余震がおきた。

少年の母親が、ちょっとした怪我をした。だが、かすりきず程度で、死にはしなかつたので、少年は泣いて喜んだ。

その次の日、またしても大きな余震がおきた。

少年と母親が、一緒に大怪我をした。少年の母親は、血だらけの手で少年を抱きしめ、泣いて喜んだ。少年もまた、泣いて喜んだ。

さらにその次の日、また大きな余震がおきた。

少年が少し怪我をしたが、大事には至らなかつた。少年の母親は、とても喜んだ。

その次の日、また大きな余震がおきた。

少年の母親が、がれきに潰されて死んだ。

少年は嘆き、悲しみ、そして苦しんだ。

少年がたよりにできる人は、もう一人もいない。

母親が死んだ次の日の夜、少年は、明日、家の近くにあつた崖から身を投げようと決心した。

その次の日の早朝、ふたたび大きな余震がおきた。
少年は死んだ。

ある県に、一人の少し性格の変わった少年が居た。
名前は・・・・るでは、苗字のイニシャルである〇と書つておこう。

〇は、先述したとおり、性格がだいぶ変わっていた。やさしくしてくれる子には厳しく、いじめてくる子にはやさしくしたり、勉強ができないのにガリ勉だつたり、とにかく変わっていた。

五月のさわやかな朝、〇が起きると、田の前は真っ暗であった。しかも、布団の中にはばすなに広く走れる空間だ。
走ってジャンプすると、体がかなり浮いた。
不思議に思った〇は、自分の体を見てみた。

つまようじのみに細い足。同じくつまようじのみに細い手。そして、その足と手は、たくさんあった。手足は実際にたくさんあるのではなく、〇からはたくさんあるように見えたのだ。

このとき〇を見た人がいたら、びっくりしていたかも知れない。何故なら、〇はハエになっていたからだ。

ハエになつてからの生活は、〇にとっては、なかなか楽しかったようだ。
空を飛べるからだ。でも行ける。

だが、寿命が近づいてくると、死の恐怖に追われるはめになつた。
飛べなくもなつて、前も見えにくくし、〇はハエの生活にだんだん嫌気がさしてきた。

そして、寿命が来た。Oは、パタリと倒れて死んだ。

それと同時に、Oは人間に戻った。

普段の生活には戻ったが、親やクラスメイト、先生たちに何度も説明された。

実は、人間に戻ったとき既に月日はかなり過ぎており、六月中旬だつたのだ。それまで、どこにものを見当たらなかつたらしい。

テント

奈多氏は、おととこ顔が見えぬ不思議なひとから不思議なテントをもらつた。

息を十秒ほどふきかけるとふくらみ、ふくらんでから息を十秒ふきかけるとしほむ。

中はとても広かつた。

奈多氏は、ここに住んでいた。

家賃は、もちろんタダ。それに、意外と住みこむのがよかつた。

もらつたときの話をしてみよ。

おとといの朝、あてもなくふらついていたところ、黒いマントをかむつているひとに話しかけられた。

「このテント、いりませんか。家賃なしで、住めますよ。」「はあ？」

「いや、だからいりませんか。タダでお貸ししますよ。」

「えーと・・・意味がよくわからないんだけど。」

「このテントは、息をふきかけるとふくらみます。中に入ると、四次元空間につながっています。とはいっても、危険なものではなく、四次元空間に間取りをいっぱことつてあるのです。どうですか？ここへ引っ越してみませんか？」

「うーん・・・」

「タダですよ、タダ。これほどお得なこと、めったにありません。」

「じゃあ一応もらつとくわ。」

「ありがとうございます。」

こうして奈多氏は自分の家を売り、このテントに住むことにした。手元には現金3000万円。家を売つて得た利益だ。

たつた今、外で息をハアハアしているジニアング中のおじさんが、このテントをめずらしげに見ている。

テントは、だんだんしぶんでいく。

そして、最後、テントは奈多氏にぴたりとくつつき、奈多氏は息ができなくなつた。

「うわあああ、助けてくれえ。」

おじさんは、中に入がいるとも気づかず、しばらくテントをながめていた。

おれは今、手錠と腰繩をされて歩いている。

「手錠」ときいたからにはもうわかつているかも知れないが、おれは捕まつたのだ。とはいっても、正式な逮捕ではない。まだ「容疑者」である。

白い鉄格子のはめられた部屋へ、おれは入れられた。入る際、手錠と腰繩ははずしてくれた。

部屋には、既に二人の男がいた。一人は髪の毛がボサボサで、めがねをかけていて、ぐつたりとしている。もう一人は、力強そうな男で、まゆげが太い。

おれは、この二人のどつちかに分類されたら、めがねをかけているほうに入れられるだろう。めがねはかけていないし、ぐつたりもしてないし、髪の毛も整っているけれど、運動が嫌いで、ゲームが大好きだ。力強そうなほうは、あきらかにスポーツが得意そうなので、おれとは全然違つと思う。

正直言つて、おれはこの二人よりはかつこうがいいと思つてゐる。よく、小学生時代に女子からもてはやされたものだ。その女子たちに手錠と腰繩をつけたおれを見られたら、なんといわれるであろうか。

さて、今まで話していなかつたが、おれが捕まつた理由を教えてやろう。「万引き」だ。それも、盗んだものは9円のうまい棒。我ながら、馬鹿なことをしてしまつたと思う。おれは貧乏で、両親とも音信不通だが、9円くらいの安いお菓子なら買えないこともない。

ここで、他の一人に留置場に入れられた理由を聞いてみた。めがね

をかけているほうは、殺人だという。殺人犯と同じ部屋だなんて、なんとも恐ろしい。

まゆげの太いほうは、トラックでひとをひいてしまったかららしい。そのひとは死んでしまったので、罪が重くなるぞ、と、警察官からおどされたそうだ。だが、故意ではないようなので、どっちかといふと、いいひとなのかもしない。

さて、それからしばらくしておれは裁判をうけたわけだが、判決は懲役2年で5年の執行猶予つきであつた。もちろんおれは執行猶予のほうを選んだ。ついでに、9円の罰金もさせられた。おそらく、うまい棒を売つていた店にわたすものなのだろう。

ここで、他の一人の判決を予想してみた。まゆげの太いほうは、懲役20年はありそうだ。殺人犯のほうは、もしかしたら死刑かもしれない。

警察署の門から外へ出ると、すがすがしい風がひたいにあたつた。

タイムマシン&血駆車（漫畫版）

「このショートショートが入っています。」

タイムマシン&自動車

タイムマシン

「やったーー！ できただぞーー！」

「できましたか、博士。」

「ここはある研究所。X博士はタイムマシンを作っていた。この日、そのタイムマシンが完成した。」

「このタイムマシンは過去には行けないが、未来にはいけるんだ。」

「ふむふむ。」

「そして、部品はまだない。」

「まつまつ。」

「つまり、ものすく軽いのである。」

「へえへえ。では、さっそく乗つてみましょうよ、博士。」

「ああ、わかった。ではのりこんでくれ。」

X博士の助手、YがX博士と一緒にタイムマシンに乗り込む。

「では、まずテストとして五分後の世界へと行つてみよ。」

「はい。博士。」

「スイッチ、オン。」

X博士が、そばにあつた赤くて大きなボタンを押す。

五分ほどたつたとき、X博士が言った。

「やつた！ 成功したぞーー！」で外にでると、五分後の世界だ。」

「・・・。」

賢明な読者なら、すぐにわかるであろう、このタイムマシンの秘密が。

自転車

あるところに、小さな子供がいた。

子供の名前は・・・ここではイニシヤルのHムとでもしておこう。この子供は、親に自転車を買ってもらった。とはいっても、値段はハンバーガーを食べたらもうなくなってしまうほどの額なので、とてもボロかった。

買った次の日、ブレーキがきかなくなつて、子供は車に当たつた。子供は一命をとりとめたが、大怪我をした。

髪の毛&宇宙人（前書き）

一つのショートショートが入っています。

髪の毛

佐藤氏は、髪の毛の生えすぎで困っていた。

ふつう、髪の毛で困ることといえばはげだが、佐藤氏の髪の毛は、どんどんと伸びていったのである。

三ヶ月前まではほとんど坊主なみに髪の毛が短かったのだが、今はもう腰のあたりまで伸びている。

ある日のこと、佐藤氏は発毛薬品をとりあつかっている会社に相談してみた。

「髪の毛を抜くことができる薬はありませんか。」

「ありますよ。使ってみますか。」

「ありがとうございます。おいくらですか？」

「三万円です。」

少々高いが、まあこれも仕方がない。佐藤氏はさっそく薬を持ちかえって、頭にふりかけてみた。

三ヶ月後、佐藤氏の髪の毛は完全になくなつて、頭ははげあがつていた。

「なんという薬だ。はげちゃ意味がないじゃないか。」

宇宙人

ある日、地球に怪しげな光の物体が墜落してきた。

光は、案の定UFOであつた。

UFOからは、緑色の三頭身ほどある目が赤い生物がてきた。

；？！”

なにやら喋ったようだ。だが、意味がわからない。

地球人は、何たかわからないと、「ショヌチヤー」をした。

すると、宇宙人はカブセルのような薬を地球人に差し出した。

「おれは、宇宙人だ。手厚く出迎えにあがるようだ。」

宇宙人は、かなり態度がでかい。

宇宙人をパーティに招待した地球人は、ある異変に気づいた。まわりにいる人間の考えていることがわかるのだ。

宇宙人にきいてみると、先ほどのんだ薬はテレパシーで相手の考えていることがわかるということを教えられた。宇宙人がこの薬をのんでいたとしたら、われわれの考えていることはお見通しなのだろうか。むやみに何かを考えることもできない。

宇宙人が帰つたあとも、薬をのんだ地球人は相手の考えていることがわかつていた。

たが、人ごみの中を歩けなくなつた。脳が、人々の考えてしる情報

を全てとりこんでしまうためだ。

とんでもない薬をのんでしまった。薬をのんだ地球人は後悔した。

全自动ロボット

2120年1月2日、片山氏はほとほと困り果てていた。

2120年1月1日に、全自动ロボットといつものが開発された。自分の体にロボットの装置をつめこみ、思つたことを、体内のロボットが感知して体を動かすのである。

つまり、「トイレに行きたい」と思つだけで、体が勝手に動き、トイレに行くことができるのだ。

このロボットは、体が不自由なひと、高齢者、めんどくさがりやのひとに人気だった。

片山氏は、めんどくさがりやなので、さっそく体にロボットをつめこんだ。

だが、思つたことをそのまま感知してしまつので、生活がしにくくなつた。

体に装置をつめこんだ直後、たまたま「このコンサート見に行きたいいな」と思つと、勝手にコンサート会場へ連れて行かれ、一時間ほど席に強制的に座らされた。

また、同じ時に複数のことを考へると、めちゃくちゃになる。

たとえば、「ピアノを弾きたい」「食事をしたい」「トイレにいきたい」と同時に思つと、トイレの方向、ピアノの方向、ダイニングの方向に体がひっぱられ、大変なことになつたのだ。

そのときは、「体が痛いのでひっぱられるのをやめたい」と考えて、からうじて助かつたものの、これではまともに生活ができたものではない。

だが、装置をはずすわけにはいかない。心臓に近い部分につめこん

であるので、除去しようとなれば命の危険が伴ひ、お金もたくさんかかるのだ。

そして、今日、片山氏ことんでもない事件があきた。「飲み物が飲みたい」と思つたら、トイレに顔をつっこまれたのだ。汚い上、息もできなくて、片山氏は死にそうになつた。

片山氏のように、困つてゐるひとはたくさんいた。あるひとは、「あのひとを訴えたい」と思つて、「訴えたい」が「歌いたい」に感知されたようで、「あのひと」という曲を強制的に歌わされた。ほかにも、殺し屋が「ひとを殺したい」と思うと自分を殺しそうになつてしまつたり、スーパーの店員が「レジを開きたい」と思つと自分が勝手に開いたり、とにかくひどかつた。

殺し屋の場合は人殺しを阻止できてよかつたかもしれないが、そのほかの場合はかなり困る。

そして、とうとう装置を開発したひとが訴えられた。だが、開発側は、が勝訴してしまつた。

なぜだ?と装置を体につめこんだひとが言つて、開発側は、「『思つたことを行動につつす』んですね。そのことを頭にいれておこしてください。」と、つめこむときと言つたはずですよ。」
とだけ言つてどこかへ去つてしまつた。

夢の超特急

中田氏が住んでる板垣市を走る鉄道、板垣鉄道。この鉄道には、「夢の超特急」というものが走っている。

行き先が不明という、変わった列車だ。

中田氏は、今日この列車に乗りつと、チケットを買って、板垣駅まで行つた。

板垣駅には、金色の列車が到着していた。これが、夢の超特急である。

中田氏が座席につくと、早くも列車は出発した。

出発してすぐ、こんなアナウンスが流れた。

「永遠に夢の世界へとこぞなつ夢の超特急、ただいま出発しました。」

「

短すぎるるので文字数あわせ

あこつえおかきくけこあこつえおかきくけこあこつえおかきくけこ

あこつえおかきくけこ

あこつえおかきくけこあこつえおかきくけこあこつえおかきくけこ

あこつえおかきくけこ

あこつえおかきくけこあこつえおかきくけこあこつえおかきくけこ

あこつえおかきくけこ

あこつえおかきくけこあこつえおかきくけこあこつえおかきくけこ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1389g/>

ショートショート集

2010年10月22日01時41分発行